

複合辞研究史 XI

複合辞の共時的記述研究—田中寛の研究について—

松 木 正 恵

1 はじめに

前稿¹では、複合辞研究の問題点を確認したうえで、複合辞認定論に対する批判的な論考を二編紹介し、複合辞を厳密に認定する必要性について再考する余地があることを示しておいた。

ここで紹介する田中寛氏の研究は、複合辞を厳密に認定する立場とは対極の、むしろ、慣用的に結び付いて用いられることの多い、複合辞に隣接した様々な辞的表現を広く射程に置き、網羅的・総合的に記述する立場に立ったものである。田中氏の一連の研究は、1980年代から継続的に論文の形で数多く発表されてきたが、その中の代表的な論文をまとめた著作として、『日本語複文表現の研究—接続と叙述の構造—』（2004 白帝社……以下、田中（2004）と略す）と『複合辞からみた日本語文法の研究』（2010 ひつじ書房……以下、田中（2010）と略す）とが出版されている。

本稿では、この二冊の概略を紹介する。田中（2004）については、取り上げられた数多くの条件表現の中で、複合辞的な表現と考えられるものだけに絞り、部単位で順に紹介していく。また「複合辞」の名称を冠した田中（2010）に関しては、章立て順ではなく観点別に考察することとし、必要な箇所にと絞ってその分析内容についても具体的に取り上げながら、筆者なりの見解を述べていきたいと思う。

2 田中（2004）

2-1 本書の構成

700頁に及ぶ大著である。副題に「接続と叙述の構造」とあるように、その内容は接続表現（条件表現、原因理由・目的の表現等）とそれに呼応する文末の叙述表現の構造を中心に複文を取り上げたものである。複文表現の研究ではあるが、接続表現・叙述表現それぞれに「複合辞」とされる複合的な関連表現が紹介されている。その意味で、本書も複合辞研究の一翼を担うものと判断した。本書の構成は以下の通りである。（詳細な目次は15頁にもわたるが、ここでは各章の節・項レベルは割愛して記す。）

序章 日本語複文表現の記述的研究・序説—境界と全体像を求めて—

第1部 条件表現の諸相

第1章 条件表現と基本文型—複文における位置づけをもとめて—

第2章 条件表現と発話機能—慣用的側面の一考察—

第3章 ト条件文の機能的分析—説明表示文を手がかりに—

第4章 ナラ条件文における発話意図—前提情報と事実認識—

第2部 条件表現の周辺

第1章 テハ条件文の構造と談話的機能—主観条件表現の生成—

第2章 逆接の条件「テモ」をめぐって—譲歩の多機能的な意味—

第3章 「テモ」の周辺—「テデモ」、「テマデ」と意志のありかた—

第4章 確定の逆接をあらわす「ノニ」—当為と翻意の意味的な構造—

第3部 原因理由と目的の表現

第1章 「カラ」と「ノデ」をめぐる諸問題—認知的把握にもとづく再考—

第2章 「コトデ」と「コトカラ」—原因理由表現における契機認識—

第3章 原因理由をあらわす「タメニ」—説明的な伝達機能について—

第4章 目的節「タメニ」、「ヨウニ」の意味と機能—主体と意志のありかをめぐって—

第4部 形式名詞と後置詞の表現

第1章 トコロ節における意味の連鎖性—「トコロヲ」、「トコロヘ」を中心に—

第2章 形式名詞「ウエ」の意味と機能—累加的な接続成分について—

第3章 動詞テ形の後置詞—分類と意味機能をめぐって—

第4章 資料：日本語学習者の作文に見る複文の誤用例 (抄)

第5部 補文節・連体節と複合辞の表現

第1章 「ノ」、「コト」節を受ける形容詞述語文—評価・判断の述定構文について—

第2章 補文節と動詞述語との意味的なありかた—「ノヲ」、「ノニ」、「ノガ」の態様—

第3章 モダリティに傾斜する動詞述語表現—複合辞との境界をもとめて—

第4章 名詞性接続成分と文末名詞文—モーダルな機能名詞—

複文研究という本書の趣旨から見て、第1部～第3部が本書の中心部分であることは確かだが、複合辞的な観点から言えば、第4部・第5部で取り上げられた複合辞的な表現群が重要である。

2-2 本書の立場と特徴

本書は、実例を大量に収集し、それをもとに帰納的な手法で各表現の意味・機能を丹念にあぶり出していく、という徹底した記述主義に貫かれている。また、長年日本語教育に携わってきた田中氏らしく、

研究のための研究もまた基礎研究として必要である一方、実際の教育に寄与する研究も、当然、必要とされなければならない。いわば、車の両輪となってはじめて「表現文法」の研究が、現実のものとなるだろう。(p.666)

との見方が強調されている。後者の実践的研究は、特に中級以上の段階で学習・指導上問題となる、節末・文末の多様な表現形式の解明に向かうことは必然であり、本書が複文研究の書でありながら多くの隣接した複合的表現を射程に入れている理由はここにあると言える。日本語教育の中級以上の学習段階においては、それまでの構造文型から表現文型へと移行する過程で、発話意図・表現意図を重視した伝達論的知識も必要となるため、

複文の論理性、一体性を構造や意味の面から、それぞれの特徴を分析・確認する過程において、次の作業にせまられることになる。つまり、視点、表現意図の記述的研究である。つまり、複文が複文の特徴をそなえたものとして、いかなる視点、表現意図にもとづいて構成され、出現するのかを解明していかなければならないだろう。これは、文論としての研究から、談話論、語用論への展開を意味している。(p.28)

という立場から、視点と発話意図を特に重視している。

田中氏は、「全編を通じて筆者の関心は接続と叙述の構造にあった。古典の用語では、「係り」と「結び」である。(p.35)」と述べる。その骨子は、「前件接続成分における誘導的な性格と後件文末成分における帰結との意味的な関係 (p.35)」²だが、先の視点・発話意図との関係から、次の4点を注視しているとする。

- ・意志性・非意志性→主体・話し手の意志の所在は必然的に後件の行方を決定・秩序づけ、順接・逆接の展開にも密接に関係する
- ・命題の評価性→マイナス的な価値意識とプラス的な価値意識とによって、文全体の発話意図が構成される
- ・人称制限
- ・モダリティ制約→とくに後件において疑問文を主とする働きかけの文の成否にかかわる (p.35)
さらに、敢えて事例の収集を手作業で行うことについては、次のような考えを披歴している。

コーパス言語学の潮流からいずれ、データベースから資料を検索する方法が時代の趨勢になってくるだろうが、それでも用例の収集・分析に重きを置きたいのは、文法研究は事象・現象研究でありながらも、根底にはものごとの個々の本質を究めるという、いわば物作りの、手作業的な姿勢が常に内在していると思うからである。言語データの蓄積は、膨大な言語処理には有効ではあっても、言語が個々の人間が発し、操る道具である以上、意味解釈においては必ずし

も一律ではないことは、十分に心得ておくべきであろう。(p.37)

様々なコーパスが公開されている昨今、それらを駆使して検索することで用例数(「量」)を稼ぐことが奨励されているような風潮さえ見られる。短時間に大量の用例が手に入る現状は、ほんの二、三十年前から見ても夢のような世界である。しかしそれは一方で、決して一律とは言えない言語資料の「質」の面を捨象することにもつながりかねない。そのことに警鐘を鳴らしたこの指摘は、傾聴に値するものと思われる。

2-3 条件表現の諸相——「ト・バ・タラ・ナラ」の関連表現(第1部)

条件表現を形成する複合辞(条件形複合辞)として、まず仮定的な事態間の依存関係を表す「トスレバ、トシタラ、トスルト」(p.51)、発話機能を担う慣用的な条件表現のうち、帰結部分である主文の慣用性によって文自体が主体的・主観的な表現単位として機能する「ト<バ・タラ・ナラ>³イイ<ヨイ・ヨカッタ>、タラドウ」(以上 p.71)「バヨサソウナモノヲ、タラナア、ト有り難イ、ト嬉シイ、タラアリヤシナイ」(以上 p.72)「チャイヤ、チャダメ、タラ大間違イ、ト比ベタラ」等(以上 p.73)が挙げられている。

また、従属文の意味的な慣用表現、すなわち、「条件文の表現形式が固定的な、つまり一種文型的な枠組みとなったものは条件形後置詞、あるいは複合辞の部類に数えられる(pp.74-75)」として、「イウ」を中心とした「トイウト、トイエバ、トイッタラ」(pp.75-76)、「思ウ」を中心とした「カト思ウト、カト思エバ、カト思ッタラ」,「考エル」を中心とした「ヲ考エルト」(以上 pp.77-79)、「見ル」を中心とした「ヲ<トコロヲ・カラ>見ルト<見レバ>」(pp.79-80)、「ナル」を中心とした「トナルト、トナレバ」(pp.80-81)、「クル」を中心とした「トクルト、トキタラ、トクレバ、トキタ日ニハ」(pp.81-82)、「スル」を中心とした「カラスレバ、ニスレバ、ニシテミレバ」(pp.82-83)等、様々な複合辞的表現が挙げられている。

ただこれらは、個々の表現が複合辞か否かといった、認定論的な点については特に考慮されていない。その次の節で「注釈としての条件句(慣用的にかつ挿入的に用いられる条件副詞句)(p.83)」として「一言で言えば、正直に言って、考えてみると、そう言われてみると、いってみれば、どちらかという、さもなければ、もしよかったら、ともすると、うっかりすると、その気になれば、うまくゆけば、何だったら、どうかすると」(pp.83-88)等の独立した副詞・接続詞相当表現(いわば「複合詞」)が挙げられているが、それらと同等に並べられていることから、条件に関わる広く多様な表現群の一角として、複合辞的な表現にも触れたという程度にすぎないことがわかる。

さらに、「ナラ」が既成事実を受け継ぐことは事態を名詞的にまとめる前提を必要とする(p.130)ことの裏づけとして、形式名詞に後接する「モノナラ、クライナラ、ツモリナラ、タメナラ、ヨウナラ、ダケナラ」(pp.130-133)を挙げ、また「ナラ」が文脈依存性を強めた形になると、「ノナラ、トイウノナラ」という引用・伝聞的機能を援用して主文判断を確定する形になる(pp.133-134)と

している。「形式名詞と条件節の接続形式・分布 (表1 p.135)」によって、「ト・タラ・レバ」には形式名詞がつきにくいのに対し「ナラ」はほとんど成立することを示し、「ナラ」が他の条件形式よりも名詞化を重視し、既成事実をもとに事実を総括するという特徴 (p.135)」があるとしている点は興味深い。同様の表は「条件節とその後置詞化・分布 (表2 p.138)」もあり、先に触れた「スル・ナル・言ウ・クル・思ウ」と「ト・タラ・レバ・ナラ」の組み合わせから成る後置詞が一覧の形で整理され、特殊な文脈でもない限り「ナラ」には成立しにくい表現が多いことが証明されている。

2-4 条件表現の周辺——「テハ」・「テモ」・「ノニ」の関連表現 (第2部)

順接条件を表す「テハ、デハ」そのものも複合辞 (複合接続助詞) と見なせるが、帰結部分である主文も取り込んだ表現単位である「テハイケナイ、テハナラナイ、テハダメダ」 (p.147, p.163) も文末モダリティを表す複合辞形式と言える。「テハタマラナイ、テハカナワナイ、テハマズイ」 (p.163) 等もそのグループと見なせるが、このような類の定型表現を思い浮かべると、「ては迷惑だ、てはどうしようもない、てはたまったものではない、てはいかんともしがたい、てはうかばれない、ては元も子もない、ては身もフタもない」等 (p.161) と枚挙にいとまがない。これらは複合辞の周辺に位置付けられる文末慣用表現と見なす方がよいだろう。

また、動詞派生のテ形後置詞にハが伴った「ニ及^レデハ、ニイタ^テテハ、トア^ッテハ、トナ^ッテハ」 (pp.160-161) を「テハ」派生の複合辞と位置付けたり、否定接続の「ナクテハ、ナイデハ」 (pp.171-172) を別立てしたりすることも可能だが、「ヨウデハ、ダケデハ、バカリデハ、ママデハ」 (p.171) は単なる「テハ」の接続表現と見なしたい。

さらに、「テハ」の拡大構文として、間接引用的に補文 (S) を受ける「Sノデハ<ンジャ>、Sトイウノデハ<トイウンジャ>」、及び直接引用的に受ける「Sデハ」についても詳述されている (pp.164-170)。

同様に、假定逆接条件の接続助詞「テモ」⁴を含んだ逆条件文「テモイイ<ヨイ>、ナクテモイイ、テモカマワナイ」 (p.147, pp.193-195) は文末モダリティを表す複合辞形式と言えるが、その数は「テハ」ほど多くないものの、同様のグループと見なせる「テモシカタガナイ、テモダメダ、テモヤムヲエナイ」や、文末慣用表現として位置付けられる「といてもいい、ても後の祭りだ、ても意味がない、ても無駄だ、ても始まらない」 (pp.198-199) 等も存在する。

また、「トシテモ、ニシテモ」 (pp.188-189)、「ト (ハ) イッテモ」 (pp.192-193) のような典型的な複合辞 (複合接続助詞) の他に、意志性を示す「テデモ、テマデ」や否定接続の「ナクテモ、ナイマデモ、マデモナク」が詳細に取り上げられていて大変参考になる (pp.212-244)。これらは単なる接続表現と見られがちだが、本書の分析により、意志・願望・決断等の提示・抑制・留保に深くかわり、前件末 (節末) と後件末 (文末) にかかなりの制約が伴うことが明らかになったため、複合辞としての位置付けが必要になってくると思われる。

なお、確定逆接条件の接続助詞「ノニ」との関連では、複合辞「トイウノニ」 (pp.259-262) の他、「ノ

ニ」と「ノガ、ノヲ、ノデ」との相関・連続性 (pp.262-264) の分析、「ノニ」と隣接する「モノノ、ニモカカワラズ、クセニ」の用例 (pp.273-275) が掲載されている。

2-5 原因理由と目的の表現——「カラ」「ノデ」の関連表現 (第3部)

まず「カラ」と「ノデ」を扱う第1章では、「カラ」の関連表現として「ノダカラ、トイウカラ、トイウノダカラ、ワケダカラ、モノダカラ、グライダカラ、ハズダカラ、ダケダカラ」等 (pp.308-312) が挙げられ、「ノデ」の関連表現として「コト (ナノ) デ、モノ (ナノ) デ、ワケ (ナノ) デ、ツモリ (ナノ) デ、ハズ (ナノ) デ、ベキ (ナノ) デ」 (pp.318-320) や、「トイウノデ、ンデ、ノデアッテ」 (pp.321-322) が挙げられている。

次章では「コトデ、コトカラ」 (pp.342-348, pp.357-360, pp.366-369) を中心に、形式名詞とデ格による接続成分「モノデ、ダケデ、クライデ、ツモリデ、トコロデ、バカリデ」のほか、「ウエデ、アトデ、ナカデ、トチュウデ、カタチデ、イミデ」の用例 (pp.348-350) が掲載されている。また、「コトデ」と「コトガ、コトハ」との連続性 (pp.350-352) や、「ハ」で取り立てた「コトデハ、ヨウデハ、ダケデハ、グライデハ」や「モ」で取り立てた「コトデモ、ツモリデモ、ダケデモ」等を記述した (pp.352-354) うえで、「コトデ」と「コトニ」の比較 (p.354)、「コトデ」と「ワケデ、オカゲデ」の比較 (pp.354-355)、「コトカラ」と「コトダカラ、トコロカラ」の比較 (pp.360-363) を行っている。最後に、「こと」型表現の一つとして「XヲYニ」「XガYデ」形式や動詞後置詞型の表現を取り上げている (pp.364-366)。具体的には、前者は「のをきっかけに、のを幸いに、ことが原因で、ことが理由で」等、後者は「のが高じて、のが災いして、ことがきっかけになって」等で、定型的ではあるが複合辞とは一線を画する表現群である。

原因理由「タメニ」の章では、原因理由「タメニ」をいろいろな角度から検証するとともに、「タメ」「タメカ」との比較も行う (pp.372-396)。また、続く目的節「タメニ」「ヨウニ」の章では、「タメニ」「ヨウニ」の比較を基本に、「タメニ」の取り立て形式として「タメニハ、タメニモ」、「ヨウニ」の拡大形式として「ヨウニスル、ヨウニナル」にも言及している (pp.397-430)。

2-6 形式名詞と後置詞の表現 (第4部)

多義的・多機能的な形式名詞「トコロ」を取り上げ、いわゆる「トコロ節」と言われる接続形式「トコロガ、トコロデ、トコロヲ、トコロヘ」等の意味と機能を考察したものである (pp.434-487)。具体的に言うと、「トコロ節」を副詞節 (「トコロ、トコロガ、トコロデ、トコロニ、トコロカラ、トコロマデ」) と補文節 (「トコロガ、トコロヲ、トコロヘ、トコロニ」) の二用法に分類し、連鎖性という観点からそれぞれの意味・機能の重なり、意味上の関連性を論じている。ここで言う「連鎖性」とは、「【A】副詞節と補文節の相補関係 【B】接続成分と文末成分の相補関係 (p.439)」の双方の現象を意味し、【B】に言及する場合、必要に応じて文末表現の「トコロ (トコロダ・トコロダッタ・トコロニヨル等)」も取り上げられている。また、補文節との関連で、「形式名詞と格助詞の関係 (表

4 p.487)」が掲載されており、興味深い。

複合辞的な観点から見ると、「トコロ節」を副詞節と補文節に二分するとは示唆的で、副詞節の方が補文節より複合辞性の高いものが多いのではないかの予測も可能である。しかし、両者が截然と区別できるとは限らないことは、述語にとっての副詞成分と補足成分とが時に連続的であることや、実際に上で「トコロガ、トコロニ」が両方の節に分布していることから明らかである。

次に取り上げられる形式名詞は「ウエ」で、単独の「ウエ」の他、「ウエニ、ウエデ、ウエハ」の三形態に注目し、それぞれの特徴が考察されている (pp.491-513)。ここでは、「ウエニ、ウエデ」はそれぞれ基本用法と派生用法に分けて記述され、一方「ウエハ」は「ウエ」の抽象化が最も進んだ接続成分で既定条件を表すが、基本・派生といった文型的な広がりを持たず、後件述語にモダリティが誘発される点で特徴的であり (p.503)、「以上 (ハ)、カラニハ、カラハ、限り (ハ)、テハ」等の類義表現 (複合辞) と置き換え可能である (pp.504-505) とする。文末意志性等のモダリティとの関連性 (「接続成分としての「ウエ」(表2 p.508)」) や「ウエ」の概念拡張のプロセス (「「ウエ」の概念拡張図 (図1 p.510)」) 等から判断する限り、基本用法より派生用法の方が必ずしも複合辞性が高いとは言えないが、このような分析方法は大変参考になる。

ちなみに、文末成分として用いられる形式名詞が各種の格助詞成分を伴って接続助詞として現れる場合、どのようなふるまいをもつのかを確認したものととして、「形式名詞と格関係の関係 (表1 p.506)」が掲載されている。「ノ」「コト」「モノ」「ワケ」「タメ」「トコロ」「ハズ」「ツモリ」「バカリ」と格助詞「ヲ」「ニ」「デ」「カラ」「ガ」の接続のあり方を一覧表にしたもので、参考例文も付してある (pp.506-507)。これによると、最も接続の幅が広いのは「トコロ」(上記五種の格に接続) で、次が「ノ」(「カラ」以外に接続) であり、逆に、限定された格にしか接続しないのは「ワケ」「ツモリ」(いずれも「デ」のみ) であることがわかる⁵。なお、「ノヲ・ノニ・ノガ・ノハ・ノモ・ノト」と動詞述語との意味的な関係については次の第5部第2章 (pp.581-596) で詳述されている。

後置詞の表現で取り上げられているのは、動詞テ形後置詞の意味機能についてである。二格支配・ヲ格支配・ト格支配のそれぞれの後置詞について、意味的な分類と機能的な特徴による分類を施してあるが、まだ分類リストの段階にとどまっている。これを詳細な形に発展させたのが、田中 (2010) の第1部第1章「動詞テ形後置詞の分類と意味機能—機能的認定と様態の意味の諸相」である。

2-7 補文節、連体節と複合辞の表現 (第5部)

「ノ」「コト」を受ける形容詞述語文は、助動詞表現と比べて迂言的なモダリティの類型を構成するとして、「合格するのは疑わしい (: 合格しないだろう)」「選出されるのは确实だ (: 選出されるにちがいない)」などの例を挙げている (p.576) が、その際、モダリティには助動詞的なものと周辺のもの (複合辞相当) とが一部並行しながら存在するとして、「注意しておかなければならない」を助動詞相当表現、「注意しておく必要がある」「注意しておくことが必要である」を複合辞の表現としている (p.573) 点が興味深い。田中氏の一連の研究では、特に複合辞の認定には触れずに記述

を進める場合が多いが、この指摘から判断すると、筆者が複合辞と認定している表現（「なければならぬ」等）よりもさらに周辺に位置する表現群を複合辞と見なしているように思われる。

本書で目次に「複合辞」と明示されているのは第5部のみで、それが第3章の副題にもなっていることから、ここでの記述は田中氏の複合辞に対する見方を反映しているものと思われる。まず、

これら（筆者注：複合辞）は語彙的な要素と文型的な要素とがしばしば未分化の状態にありながら、文法化への過渡的な機能を担っており、～＜中略＞。複合辞の整理手法はいわば、文章の読解、解釈の作業とも不可分の関係にある。しかしながら、従来の複合辞に関する統語的、意味的考察や議論の多くが助動詞的表現や格助詞相当表現のなかの主要な対応に限られており、複合辞以前、つまり周辺の、予備的な候補グループについては明確な認定基準もないまま、雑多な表現単位として放置されているというのが実状である。（p.597）

とした上で、文規定の第一段階としての「構造文型」（文の構造 proposition に重点を置くもの）と、第二段階としての「表現文型」「機能文型」（文の姿勢 modality を重視するもの）とは別個に存在するのではなく、相互に有機的な連携を成すことに触れ、

さらに「表現文型」、「機能文型」の発展には「場面文型」あるいは「談話文型」、「連文文型」といったものも考えられるが、複合辞の構造的、機能的特徴はこれらに広く分布するものである。（p.598）

と複合辞の存在意義に言及する。そして、

本章では従前の主たる複合辞の輪郭を拡げて、隣接する意味を構成する周辺の、予備的な複合辞とも見なされうるもので、補文節をともなう動詞述語文を考察の対象とし、文末表現の意味的、形態的側面におけるいくつかの特徴的なカテゴリーを設定しながら、モダリティに傾斜する動詞述語表現の態様について考察する。（p.598）

とその立場を述べ、文末における組み立て的な表現形態を「モダリティ傾斜」として、複合辞との境界を求めながら、「形態的特徴としてのプロトタイプ的なカテゴリーを想定することによって使用頻度の高いものを抽出し（p.599）」、記述的な考察が行なわれている（pp.599-626）。

「文末述語表現の構造と分類（pp.605-608）」では、補文節の現れる基本的な形態を以下の6種に分類する。

- 【A】形式名詞「コト」「ノ」「トコロ」をともなうもの（「～コトを聞いた」等）
- 【B】間接引用節「ヨウ（ニ）」をともなうもの（「～ヨウニ祈っている」等）

- 【C】直接引用節「ト」をとともなうもの（「～ト書いてある」等）
 【D】間接疑問〈推量〉表現の形式をもつもの（「～カドウカ疑問だ」等）
 【E】中心語（述語動詞の目的語）が連体修飾節を受けるもの（「～する計画を立てた」等）
 【F】その他、肯定・否定にかかわるもの（「～するひまもない」「～分からなくもない」等）

そしてこれらを、「文末にあらわれて補文節を承け、底名詞を共有しながら、同時に連語成分をもつ述語形式 (p.607)」にとらえ、さらに以下の5つのタイプに分類する。

- ①名詞性述語文；名詞を核として、連体修飾節、補文節を受けるもの
 a 「見込みだ、次第だ、寸法だ、覚悟だ、思いだ、限りだ、構えだ」等
 b 「のが実情だ、のは当然だ、のはごめんだ、のが関の山だ、のがオチだ」等
 ②形容詞性述語文；判断、評価をあらわす形容詞を核として、補文節を受けるもの
 a 「のは確かだ、のは幸いだった、のもおこがましい、のは酷だ」等
 b 「にふさわしい、にはほど遠い、のに夢中だ」等
 ③連語構成型述語文；述語成分が名詞と動詞、名詞と形容詞の一定の連語的構造からなるもので、連体修飾節、補文節を受けるもの
 a 「可能性がある、ためしがない、運びになる、向きも多い、公算が高い、構えを見せる」等
 b 「との疑いが強い、との印象をいだく、という方針を示す、という考えを明らかにする」等
 ④動詞性述語文；話し手の意図をあらわす動詞を核とし、補文節、引用節を受けるもの
 a 「に超したことはない、のが分かった、のは止むを得ない、ことは否定できない、に限る」等
 b 「と思う、と信じている、と踏んでいる、とは限らない」等
 ⑤その他の特殊形述語文；間接疑問文をとる述語形式など
 「かどうか { (は) 怪しい、疑問だ、予断を許さない}」等

以下、④の動詞性述語文の態様について、内包するモダリティ的な特徴の分布を詳細に記述している。挙げられた表現は、「ことが決まる、ことが推測される、ことが浮き彫りにされる、のが気になる、のが功を奏する、のが裏目に出る」「ことは許されない、ことは避けられない、のはやめられない、のは欠かせない、のも気が引ける」「につきる、に過ぎない、にまかせる、にあたいする、にほかならない」⁶「ことにつながる、のに驚く、のに腹を立てる、ことに甘んじる」「ことを禁じる、ことをほのめかす、のをためらう、のを拒む」「と違う、と似ている」「と見なされる、と称される」などである。また、否定形式で心的な状況を表す「てならない、てたまらない、ていられない、ておけない、ないではいられない、ずにはすまない」についても最後に触れられている。

最後の章では、モーダルな機能名詞による名詞性接続成分と文末名詞文が網羅的に取り上げられている (pp.627-655)。まず、接続成分にも文末標識にも動詞的なタイプと名詞的なタイプが存在する⁷が、ここでは後者を取り上げることを述べたのち、文末標識の名詞的タイプを例に、

「名詞だ」のかたちで述語成分となるものや、また機能動詞や相対的な形容詞などの付加的成分

をともなって「底名詞」と動詞や形容詞が固定した連語的な構造を構成して述語成分となったものがある。〈中略〉それぞれの「底名詞」は連体修飾を承けながらも、一方で文末の連語成分ともなっている。一つの語が機能的に二つの文の機能とリンクしている場合(例: もつれ込む公算が太きい)、本章ではこれを複合辞に準ずる文型、複合辞候補の文型としてとらえることにしたい。(p.629)

としている。

以下、名詞の接続的な成分を意味的に分類したものと、「時間節のマーカ-:~当時, ~あいだ, ~かたがた, ~うちに, ~矢先, ~昨今」「過分の結果, 結末:~すえ(に), ~結果」「条件・逆条件, 制限:~次第, ~ところで, ~以上」「対比, 動作の同時進行:~一方, ~かたわら」「原因理由の引用・説明:~ばかりに, ~おかげで」「逆接, 行為の代替:~つもりが, ~どころか, ~代わりに」「結果の存続, 動作行為の保留:~きり, ~まま」「頻度, 比例的な変化の関係:~たび(に), ~ごとに」「追従, 状況の設定:~通りに, ~つもりで」「状態の程度, 比較:~くらい, ~割に」「取り立て, 特徴づけ:~あたり, ~ところ」等が挙げられている(pp.630-636)。

また、「名詞が実質的な意味をいくぶん残しながら、形式名詞への展開が進んで、一種の個別的な接続成分となったもの(p.636)」として、以下のような様々な形式を列挙している。

○〈名詞・デ〉構造……「ある動作にともなう態度, 姿勢:~調子で, ~格好で」「ある動作の意味づけ, 方向づけ, 立場表明:~意味で, ~視点で」「原因理由, 影響などによる新事態の出現:~口実で, ~報いで」「ある行為, ある結果をもたらすための目的行為, 手段, 条件の明示:~目的で, ~覚悟で」等(pp.636-637)

○〈名詞・ニ〉構造……「ある動作行為の代償, 恩賞, 反応など:~お返しに, ~お礼に」「ある動作行為の確証, 背景, 資格:~しるしに, ~証拠に」「状況, 目的, 結果の設定:~記念に, ~お祝いに」「機会便乗, 付随的な動作行為:~機会に, ~腹いせに」「その他, 慣用的な接続成分と見なされるもの:~順番に, ~留守に」等(pp.638-639)

○後置詞的な接続成分の〈XをYに〉〈XがYで〉という準複合辞的形式(pp.639-641)

・連体節を承ける接続成分と意味的な平行関係をもつもの……「~目的で:~を目的に」「~覚悟で:~を覚悟で/覚悟して」「~縁で:~が縁で/縁となって」等

・単独でも接続句, 副詞句として用いられるもの……「~かわりに, ~罰として, ~手始めに」等

・〈XをYに〉型……「~を前提に, ~をしおに, ~を目安に, ~を土産に」等

・〈XがY {で/となって} 〉の移行・結果移行型……「~がきっかけで, ~がもとで」等

さらに文末名詞文については,

話し手の判断, 意志などの程度を部分的に, かつ約束的に述べるもので, 名詞文としてのフレームを持ちながら, 働きそのものは動詞的であるという, いわばハイブリッド化された性格のも

のである。〈中略〉名詞述語文は従来、動詞文、形容詞文のそれとくらべて単文レベルの領域に考察が集中し、名詞修飾述語構文などを視野に入れた研究はまだ十分とはいえない。ここで扱う擬似的な名詞述語文もその一群である。名詞には下位分類として、動作性名詞や機能的な名詞があり、文構造のなかに組み込まれて他の成分とともに緊縮したかたちで用いられる場合が少なくない。(p.642)

とした上で、話し手の視点に立った機能的な分類と、形態的な分類が試みられている。

まず機能的な分類としては、「現在の状況の提示：～今日だ、～この頃だ」「話し手の意向、姿勢、判断評価の提示：～意向だ、～狙いだ」「状況判断の提示：～状況だ、～様子だ」「心境、感覚、感情的な立場、状況：～感じだ、～心境だ」「予定、可能性の提示：～見通しだ、～雲行きだ」「婉曲的、迂言的な態度表明、説明：～所存だ、～次第だ」「道理、計算、確認：～道理だ、～計算だ」「絶体的、あるいは婉曲的な不可能、否定、事態の回避の提示：～柄ではない、～どころではない」等が挙げられ (pp.643-646)、一方、「文末にある種の機能的な名詞とともに付加的な用言成分が一定の連語的構成となってあらわれるもの (p.646)」の形態的な分類として、以下が示されている。

- ・「～がある」の形式をとるもの……「～覚えがある、～観がある、～自信がある、～節がある」等
- ・「～がない／～もない／～はない」の形式をとるもの……「～術がない、～保証がない、～余地はない、～気配はない、～当てもない、～心地もない」等
- ・「～にある」「～におかれる」の形をとるもの……「～運命にある、～立場におかれる」等
- ・「～になっている」「～にきている」「～に終わる」の形をとるもの……「～運びとなる、～ハメになる、～時期にきている、～結果に終わる」等
- ・「～が強い」「～が大きい」「～が高い」「～が多い」……「～空気が強い、～おそれが大きい、～可能性が高い、～向きが多い」等
- ・「～を見せる」「～を示す」「～を固める」などの形をとるもの……「～気配を見せる、～決意を示す、～意向を固める、～傾向が見られる、～メドが立つ、～手間がはぶける」等 (pp.646-651) ⁸

これらはまだ表現リストの段階だが、この内容を詳細な形に発展させた論考が田中 (2010) には掲載されている。名詞性接続成分については、「第1部第4章 結果誘導節における発話意図—主観的評価をめぐる—考察」「第2部第3章 “瞬間”と“同時”を表す複合辞—事態生起の偶発性と恣意性の観点から」のそれぞれ一部として、〈名詞・デ〉〈名詞・ニ〉構造については、「第2部第2章 擬似的な連体節と従属接続成分—「理由で」「代わりに」「反面」などをめぐって」として、〈XをYに〉〈XがYで〉については、「第1部第3章 “きっかけ”を表す構文—〈類義語〉と〈類義文型〉についての—考察」として、また文末名詞文については、「附章 名詞述語文と“説明”のモダリティ表現—「ことだ」「ものだ」から「寸法だ」「毎日だ」まで」がほぼこの内容に相当している。

3 田中 (2010) ⁹

3-1 本書の構成

前著の田中 (2004) と同様、600 頁を超える大著である。内容は接続表現 (副詞節) と文末表現に大きく分かれ、取り上げられた複合辞・関連表現は 1000 を超える。本書の構成は以下の通りである。(詳細な目次は 15 頁にもわたるが、ここでは各章の節・項レベルは割愛して記す。)

序章 複合辞からみた日本語文法の研究—文型研究と文法研究の接点をもとめて

第 1 部 接続表現 副詞節の諸相 (1)

- 第 1 章 動詞テ形後置詞の分類と意味機能—機能的認定と様態的意味の諸相
- 第 2 章 漸進性と相関関係を表す後置詞—「につれて」「にしたがって」などをめぐって
- 第 3 章 “きっかけ”を表す構文—〈類義語〉と〈類義文型〉についての一考察
- 第 4 章 結果誘導節における発話意図—主観的評価をめぐる一考察

第 2 部 接続表現 副詞節の諸相 (2)

- 第 1 章 レバ条件文における文脈の意味—論理関係と節末・文末叙述の構造
- 第 2 章 擬似的な連体節と従属接続成分—「理由で」「代わりに」「反面」などをめぐって
- 第 3 章 “瞬間”と“同時”を表す複合辞—事態生起の偶発性と恣意性の観点から

第 3 部 文末表現とモダリティの構制 (1)

- 第 1 章 「しかたがない」「やむをえない」考—〈諦念〉をめぐる省察
- 第 2 章 条件と可能性・蓋然性のモダリティ—「かもしれない」「かねない」とその周辺
- 第 3 章 確信と確実性判断の交渉—「にちがいない」と「はまちがいない」を中心に
- 第 4 章 言語行動論からみた発話行為と文法—〈禁止〉の構文をめぐる

第 4 部 文末表現とモダリティの構制 (2)

- 第 1 章 心的表出と評価判断のモダリティ (1) —命題の評価性をめぐって
- 第 2 章 心的表出と評価判断のモダリティ (2) —“引用”という観点からの考察
- 第 3 章 否定文末形式の意味と機能 (1) —判断・評価の表現の諸相
- 第 4 章 否定文末形式の意味と機能 (2) —否定の論理構造と倫理的な意味

附章 名詞述語文と“説明”のモダリティ表現—「ことだ」「ものだ」から「寸法だ」「毎日だ」まで

3-2 本書の立場と特徴

膨大な事例収集を背景に徹底した記述主義をとり、日本語教育から日本語文法を捉え直そうとする田中氏の立場は前著から一貫している。「まえがき」の一部を引用してみる。

主として接続と文末叙述の交配をめぐる諸相と、同時にそれら言語発想の様式、発話意図の背

景にあるものを、いくつかの主題のもとに考察した。本研究の主軸には文型を言語行動から多面体としてとらえ、そのなかで主体、および観察者の視点が文脈、伝達においてどのように内在し、また現象をどのように切り取り、認識の中に取り込んでいくか、という観点が通底している。日本語の多様で豊かな表現は、さまざまな形式によって担われている。複合辞と称される構文形式は論理的な文脈を構成する重要な要素で、これを類型的、類義的観点から整理することが、日本語の表現性と論理的構造を明らかにする重要な作業となる。(p. v)

ここで述べられている「接続と文末叙述の交配」は前著である田中(2004)からの流れでもあるが、本書でも接続表現(副詞節)と文末表現を中心に取り上げ、前件の展開と後件の終結の多様性に注目したことを意味し、また、「言語発想の様式、発話意図の背景」は具体的には目次の「主観的評価」「諦念」「心的表出」「命題の評価性」等に、「言語行動」は「言語行動論からみた発話行為と文法」等にそれぞれ反映されていることがわかる。

なお、前著でも、動詞テ形の後置詞・動詞述語表現・名詞性接続成分・文末名詞文は扱われていたが、全体像を俯瞰するために分類・整理された表現リスト的な位置づけだったため、本書では類義表現も含めて各表現の考察を深く掘り下げ、多くの具体例を紹介しながら詳述している。その意味で、本書は前著の続編とも言えるものである。

膨大かつ多岐にわたる本書の内容について、限られた紙面で紹介・評価することは明らかに筆者の能力を超えているが、以下、なるべく研究の大枠がわかるよう配慮しながら、筆者の問題意識の及ぶ範囲でポイントをしばってコメントを述べたいと思う。

3-3 複合辞認定論の観点から

幾つかの語が複合して一まとまりの形で辞的な機能を果たす表現群を「複合辞」と呼ぶが、どのような表現を複合辞と認定すべきかという複合辞認定論も以前から存在している(永野賢(1953)・松木(1990)等)。しかし、複合辞自体が単語の接続から一語化した助詞・助動詞までの間に連なる辞的表現群の総称であり、その複合の程度が実に多様であることから、明確な基準を立てることは極めて困難と言える。

本書はその題名からもわかるように、複合辞を手がかりに日本語文法を研究したもので、実際、副詞節を構成する「複合格助詞」「複合接続助詞」と文末表現を構成する「複合助動詞」に焦点をあてているが、複合辞か否かを厳密に区分する立場には立たない。

例えば、第1部第1章の動詞テ形後置詞については、一般に複合格助詞と認定されているものに限らず、動詞本来の機能性を維持しながら後置詞的なふるまいをする周辺の表現も数多く取り上げられている(pp.25-80)。試案とされる動詞テ形後置詞リスト(pp.75-76)によると、

I類：文法化が進んだもので、格助詞、前置詞に相当するもの

について、にとつて、に対して、に応じて、に関して、をめぐって、として、にあたって、
に際して、に先立って、にもとづいて、につれて、にしたがって、にともなつて、を通して、
を通じて 等

Ⅱ類：Ⅰ類に隣接したものも含め、比較的出現・使用頻度の高いもの

に向けて、を含めて、を除いて、とくらべて、と合わせて、をおいて、をめざして、を踏まえて、
にちなんで、を受けて、に引き続いて、を介して、をのぞいて 等

Ⅲ類：Ⅱ類ほど高くはないが、しばしば出現するもの

にかこつけて、を見計らつて、に寄せて、を期して、にならつて、に交じつて、を交えて、
が災いして、が幸いして、が昂じて、をとらえて、をはさんで、を添えて、にまぎれて、と
並んで、に続いて、と言つて、と思つて、と考へて、とみて、とみえて、とは打つて変わつて、
がたつて、につけこんで、をおかして、をおして、をさして、をこえて、に絞つて、をあ
とにして、をぬきにして¹⁰、をこめて、をさしおいて、をぬすんで、をかすめて 等

のように、必ずしも複合辞らしさ（複合辞性）ではなく出現頻度をもとに分類されている。Ⅰ・Ⅱ類は日本語教科書の中・上級レベルで扱う表現に該当することからも、日本語教育における実用性を重視した見方でもある。さらに注の形で、「後置詞の“萌芽的”な形態」(pp.79-80)として、

が引き金になつて、を抜きにして、を待ちかねて、に氣をとられて、に押されて、と組んで、
にしびれをきらして、に切羽詰まつて、に追われて、に混じつて、を決め込んで、を跳ね返して、
を振り切つて、に甘んじて、(嵐)を冒して、(病氣)を押して、(親)に背いて、(時代)に抗して、
(方針)に逆らつて、に重ねて、が重なつて、に輪をかけて、を兼ねて 等

も挙げられているが、このあたりの表現になるとかなり個別的・語彙的な表現に過ぎず、一般の動詞の様態修飾機能と大差ないということにはならないだろうか。

また、第1部第3章では〈XをYに〉形式に言及している (pp.115-136)。

を機に、をきっかけに、を境に、を最後に、を皮切りに、を手掛かりに、をバネに、をもとに、
を頼りに、を条件に、を中心に、を軸に、を背景に、を支えに、をよそに、を前に 等

が代表的だが、p.133掲載のリストに依りながら、

を相手に(して)、を視野に(入れて)、を拠点に、を目標に、を拠り所に、を根拠に、をいいことに、
を幸いに、を理由に、を盾に、をカサに(きて)、を尻目に、を抜きに、を横目に、を胸に、を
ネタに、をえさに、を題材に、を肴に、を例に(とつて)、をターゲットに、を目の当たりにし

て、をそっちのけに (して)、を別にして (は別として)、をはじめ (として)、を向こうに回して、
をあとに (して)、を担保に (入れて) 等

と見てくると、多少慣用的とは言えるが、付帯状況の副詞句に過ぎない表現も含まれている。

同様の問題は、第2部第2章の擬似的連体節 (pp.191-235) で挙げられた、

表情で、口調で、様子で、趣旨で、(という) 視点で、資格で、感じで、格好で、態度で、姿で、
足どりで、つもりで、一心で、思いで、理由で、狙いで、疑いで、関係で、約束で、口実で、設定で、
意味で、条件で、点で、方向で、範囲で 等

の「Nで」形や、

以上に、ついでに、代わりに、のと引きかえに、通り (に)、記念に、証拠に、しるしに、し返しに、
報酬に、お祝いに、お土産に、お詫びに、腹いせに、見返りに、お礼に、思い出に 等

の「Nに」形、さらには、

一方 (で)、他方 (で)、反面、半面、一面、他面、かたわら、がてら、かたがた、分、が最後 等

の「N (無格)」形の表現と様態副詞句の関係にも生じている。

さらに、附章の名詞述語文 (pp.475-506) の中でも、

点だ、思いだ、感じだ、気持ちだ、機会だ、段階だ、最中だ、時期だ、時分だ、始末だ、寸法だ、
覚悟だ、魂胆だ、意向だ、気配だ、雲行きだ、約束だ、所存だ、相談だ、注文だ、計画だ、予定だ、
状況だ、現状だ、格好だ、仕組みだ、具合だ、勢いだ、考えだ、方針だ 等 (pp.493-501)

や、〈のがNだ〉形式の

のが実情だ、のが現状だ、のが狙いだ、のが筋だ、のがコツだ、のが関の山だ、のが落ちだ、
のが運のつきだ、のが人情だ 等 (p.506)

にも同様に生じているものと思われる。

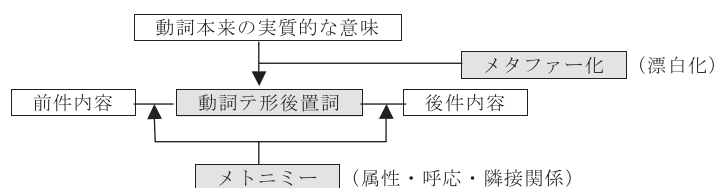
3-4 文法化の観点から

前節で触れた複合辞らしさ(複合辞性)は文法化とも大きくかかわる。複合辞性と文法化の関係(松木(2006))についてここで述べる余裕はないが、複合辞の意味・機能を文法化に着目して連続的に捉える見方は重要である。田中氏もメタファー化や文法化を軸に様々な考察を試みている。

例えば、動詞テ形後置詞については、

動詞が形式的、機能的な意味を拡張していく背景には、その動詞の持つ意味が具体的なものから抽象的なものへの変容が認められると同時に、形態的にも特化されていく特徴がうかがわれる。(p.27)

として、その思考・認識のプロセスを、「動詞テ形後置詞生成におけるメタファーとメトニミーの関係性」として下記のように図式化している(p.27 図2)。



つまり、メタファー化によって、動詞本来の実質の意味から動詞テ形後置詞が生成されるとともに、動詞テ形の前件・後件内容はメトニミー的な属性・呼応・隣接関係によってつながられているという主張である。田中氏はここで「かまける・かこつける・さしおく・まぎれる」等を取り上げ、

- (1)¹¹ 商売にかまけて、家庭をないがしろにした結果、体まで壊した。
- (2) 忙しさにかこつけて、故郷の両親に手紙一本書かなかったことを悔やんでいる。
- (3) 冗談はさしおいて、本題に入ろうではありませんか。
- (4) 費用のことは差し置いても、私には旅行に行く時間などない。
- (5) 現場のどさくさにまぎれて、暴利をむさぼる輩がいる。

などの例を提示しているが、上図の思考・認識プロセスに基づいた説明はない。メタファー化については異論はないが、これらの前件・後件がすべて上図のようにメトニミーの関係で説明できるとは限らないようである。例(1)の「商売→家庭」、(3)の「冗談→本題」は隣接関係ととらえやすいが、(2)(4)(5)の場合には、更なる推論や文脈による知識の援用が必要になるとと思われるからである。

「文法化」については、「と思うと」類の多義性の分析にあたって「文法化をめぐって」と副題が付され(p.265)、文末の「つもりだ、予定だ、計画だ」等を「文法化した名詞述語文」(p.496)と呼んでいることから、「文法化」とのかかわりを意識していることが読み取れる。「文法化」と類似した表現と思われる「複合辞化」¹²を用いて説明している箇所もあり、例えば、「にちがいない」と「の

「こと は間違いない」の比較では、

ノ、コトが介在しない接続形式ではもっぱらモダリティ的な性格が押し出され、ノ、コトが介在する接続形式では判断的な表現が共通して観察されることが分かった。これはノ、コトが名詞化の機能をもち、観察記述の事柄を客体化し、属性的な性格として意義付ける働きが背景にあると思われる。これに対して、ノもコトも介在しにくい形式ではより複合辞化が進んだものである。(p.343)

としている。また、「ないではすまない」「ずにはすまない」の比較では、

(93) 大事な書類なのに、忘れていた、知らなかった、ではすまないだろう。
「ないではすまない」が「では」と「すまない」に区切りがあり、(93)のように必ずしも否定形を受ける必要はない。否定形と一体化した「ずにはすまない」のほうが複合辞化がより進んだものといえよう。(pp.385-386)

とも述べられている。しかし本書では、類義表現も含めた様々な表現群の異同や多義性を論証する過程で、文法化の見方が必ずしも有効には生かされていないように感じられた。

例えば上掲の「と思うと」類の文法化 (pp.265-269) では、まず中心となる三つの用法を挙げる。

① XとYのそれぞれの事態が、瞬間的な時間差で継起する様子を表す。

(6) 上空でピカッと光ったかと思うと、落雷が耳をつんざいた。

② XとYの事態は対照的な内容で、その反復行為、現象の転換がめまぐるしいさまを表す。

(7) さっき泣いていたと思ったら、もう笑っている。おかしな子だ。

③ Yには感情的な表現がきて、Xの事態につられて抱く感情が表される。

(8) 両親に叱られるのではないかと思うと、なかなか話を切り出せない。

その上で、ほかにも顕著な用法がいくつか観察されるとして、以下のような用法を挙げている。

④次に展開する予想以上の事態の急変を表す。

(9) ポツポツ降りだしたかと思ったら、バケツをひっくり返したような豪雨になった。

⑤逆接の意味を含みつつ、前件で想定した事態とはまったく別の事態の生起を表す。

(10) 試験はもっと難しいだろうと思っていたら、案外やさしかった。

⑥意外な事態でありながら、当然の事態を確認する気持ちで用いられる。「案の定」「道理で」などの副詞があらわれやすい。

(11) 今度の試験は聴解が難しいだろうと思っていたら、実際その通りだった。

⑦「かと思えば」「かと思うと」には対比、並列の用法があらわれやすい。

(12) 彼女は煙草を吸うかと思えば、酒も飲む。

⑧後件は並行的な事態を表し、必ずしも同一場所における同時性や瞬時性を表すものではない。

(13) 万歳が何度もこだましたかと思うと、その合間に人事や政策についての噂が交わされ、
猟官めいた囁きがくぐもっていた。(福田和也『昭和天皇』)

⑨気持ちの移り変わりなど、変化、変転の著しいさまを表す用法。

(14) 桃の花が咲いたかと思うと、もう散って今度は桜の花だよりだ。

⑩以上の用法の延長として、継起や展開のめまぐるしさを表す。「今度は」という副詞をとまなう。

(15) 妻の病気が治ったかと思えば、今度は夫がインフルエンザときた。

しかし、前後で重複していたり、他との関連づけが可能だったりする用法も見られるため、「思う」の本義をどれだけ保持しているかという文法化(の中の“保持化”)のレベルによって大きく整理し直した方がわかりやすいのではないだろうか。例えば、次のようなまとめ方である。③はその意味で保持化のレベルが最も高く、動詞「思う」本来の用法に近いものと位置づけられ、⑤⑥もそのバリエーションである。次に保持化のレベルが高いのは瞬間性用法の①で、④も同様の用法と言える。最も文法化の進んだタイプは②の対比用法で、⑦～⑩も同様のレベルと見なせるだろう。つまり、文法化の見方を導入することで、③⑤⑥⇒①④⇒②⑦～⑩のような一本の流れとして整理することが可能になるのではないかとと思われる。

また、「(という)ものだ」の諸相を記述した部分(pp.481-485)は、例えば、“実質代用用法→本質提示用法→主張用法→働きかけ用法”のように、文法化(の中の“主観化”)の流れ(命題的→テキスト的→感情表現的→対人的用法)に沿って拡張のさまを位置づけることも可能であるし、「Xことがない」の分析(pp.442-445)は用例・解説が羅列的でわかりにくい印象を受けるが、“事態描写→間接的働きかけ→直接的働きかけ”といった流れで用例・解説の順序を組みかえて示せば、より明快となり説得力が増すのではないだろうか。

3-5 連体修飾構造の観点から

第2部第2章では、連体修飾構造を受ける名詞が接続成分となった「擬似的な連体節」を取り上げている。自身は連体修飾構造を取りながら、主節に対しては連用修飾節(副詞節)として機能するこのタイプは、従来の複合辞論では形式名詞を中心とした複合接続助詞「ために、おかげで、くせに、ところで、ものを、かぎり、以上は、あげくに、わりに、そばから、どころか」等が取り上げられていた。本書では、実質的意味をほぼ保持している名詞も含めて幅広く収集し、デ格「調子で、様子で、姿勢で、しぐさで、つもりで、理由で、目的で、疑いで、関係で、方向で」等(pp.192-210)、ニ格「ついでに、代わりに、通りに、証拠に、しるしに、お詫びに、機会に、とは裏腹に、たびに」等(pp.210-222)、無格「一方(で)、他方(で)、反面、一面、かたわら、がてら、かたがた、分、が最後」等(pp.223-233)を紹介している。

底の名詞が接続成分化するのに格助詞がどのように関与するかに着目した点は興味深く、デ格には「ある種的手段化、動的な、あるいは拡散的な影響の観察の姿勢」、ニ格の場合には「状況に密着

した動作行為・現象の継起、影響の直接波及といった限定的、収束的な観察の姿勢」が認められる一方、無格のものは「そうした手続きを踏んで評価判断を述べるというよりも現にそこに位置する存在を直截に映し出すといった、当該観察の現場や対象についての詠嘆的な心情がいくらか投影される」(p.233)としている。この点については、実例に基づく更なる検証が必要となろう。

3-6 名詞述語文の観点から

附章で扱われる名詞述語文は、連体修飾構造を受けた名詞を核とする述語文で、「ことだ、ものだ、ところだ、わけだ」等形式名詞由来の典型的なものから、アスペクト的な「一方だ、段階だ、最中だ、始末だ」、モダリティ的な「感じだ、模様だ、見通しだ、覚悟だ、気だ、構えだ、寸法だ、予定だ、方針だ、所以だ」、時を指定する「機会だ、時だ、時期だ、頃だ、時分だ」等 (pp.475-501) とかなり幅広い。

さらにはこれらを、等価追認的な、

(15) 村田さんは落ち着いていて、いかにも有能なサラリーマンといったタイプだ。

や詠嘆的・余情的語りの、

(16) 定年後、数年で他界する知人の悲報を聞くにつけても、動けることの幸せをかみしめている 毎日である。(pp.502-503)

のような名詞述語文とも関連づけた上で、

体言止めの文のほうが一般に周知された情報、落ち着いた印象をもたれるのは、状況の再提示、という機能によるものであろう。こうした用法は現代語に始まったものではなく、聞き手、読み手に臨場感をあたえるような気持ちで従来から用いられているもので、～。<中略>総じて名詞述語文にはこれまでの事態発生・成立の経緯に立脚し、当該事象・事態を既成事実化することによって、話し手も聞き手もそこに存在させようとする、一体感を認めることができよう。(p.504)

とまとめている。今後、体言止めや名詞述語文そのものの機能的意義づけを探ることが課題とされるが、その際の重要な足がかりとなるだろう。

また、3-5で挙げた連体修飾構造による接続成分と名詞述語文としての文末成分は相関関係にある (p.505)、という指摘も見逃せない。「つもりだ」を例にとると次のようなことである。

(17) a 先生になったつもりで、一時間だけ教壇に立ってみました。(意志を表す接続成分)

b 冗談で言ったつもりで、特にいじめようという気はなかった。(連用中止成分) (p.235)

aは様態修飾(意志)の接続成分「つもりで」だが、bは文末成分「冗談で言ったつもりだ」の中止法にすぎず、これを田中氏は「見せかけの接続成分」と呼んでいる (p.235)。しかし、接続成分に見えて実際は連用中止成分しか持たず、様態修飾をなさない表現もあり、それが次例である。

(18) a 主人は休みで寝てばかりで、横の物を縦にもしない横着者なのよ。(連用中止成分)

b 日本に来たばかりで、まだ何も分かりません。(連用中止成分) (p.235)

〈接続成分—文末成分〉の移行の原理・条件については、今後の考察を期待したい。

3-7 日本語教育文法の観点から

田中氏は長年の日本語教育の経験をもとに実践的な教育文法を模索するなかで、「文型研究を通して文法を見直す」(p.3)ことを提起している。本書が複合辞を切り口にした日本語文法研究であることはその具体化であり、その立場から見れば3-3で述べた複合辞認定論に拘泥しないのは当然である。その表現が複合辞であるか否かにかかわらず、むしろ類義的な定型表現群を広く取り込み、個々の異同を明確に記述することで日本語教育に資する方向性を選択するからである。また、文型そのものを場面的・多機能的に捉え、〈構造文型→表現文型→機能文型〉のように発展的に把握する必要も生じる。機能文型とは対人的機能や文脈・談話の中での予測的機能を重視したもので、文型「ほうがいい」の発展的な把握のしかたを観察して上の流れで示せば、

〈構造・意味〉 ⇒ 〈表現〉 ⇒ 〈機能〉

比較・選択 助言・警告 判断・評価

のようになるという。(pp.12-13)

このような機能重視の見方は随所に現れており、例えば3-3-3-6で挙げた名詞述語文も、

(19) a 今こそみんなで協力する時だ／時期だ b それは無理な相談だ／注文だ／話だ

c そろそろ到着する頃だ／時分だ d 北海道を旅行する計画だ／予定だ

を比べてみると、a・bは誘いかけ・働きかけ・他者説得といった対人的機能が際立つのに対し、c・dは実況や客観的事態を描くにとどまる(pp.496-498)。もちろん、これは名詞だけでなくそれが受ける文のタイプとも連動する問題ではあるが、非常に示唆的である。

また予測的機能についても、第1部第4章で結果誘導節を主観的評価の大小に基づいて四段階に分けたこと(p.159)、接続成分と文末成分の関係性や副詞と文末成分の関係性を、典型的な呼応関係として文型の形で取り出して見せたことなど、様々な面で工夫が見られる。

なお、ここでは詳細には触れられないが、機能重視の見方が場面重視の言語行動・発話行為と結びついていたのが、第3部第4章の禁止表現の考察である。

3-8 その他——細かい問題点をいくつか

本書は大部であるだけに、誤植も多く目についた。それも、助詞や数字の単純な誤植だけでなく、対義語に修正必要な箇所(「よく→悪く」(p.182)「否定→肯定」(p.430))、例文の入れ替えミス(p.55,p.479)、比較対照すべき形式の脱落(p.490)、説明文の位置のずれ(p.447,p.501)、表現・例文の重複(pp.75-76,p.319)、誤植に伴い説明自体が矛盾してしまった箇所(p.51,p.103)等、内容解釈にかかわる部分にも見受けられたのが残念である。

また、巻末資料として「複合辞研究文献目録」(pp.507-580)が付いている。【節末にあらわれる複合辞】【文末にあらわれる複合辞】【その他の複合辞に関連する研究文献・参考文献】【辞典類・参考書類】に分けられ、前二者は更に細かく下位項目に区分されているため、ある複合辞についての先行研究を調べるのには大変便利ナリストである。ただこれが、本文中で触れられた引用・参考文献の出典を示すリストとしても兼用されているため、目的の参考文献を探しにくいという難点もある。一例を挙げると、pp.325-326の注2の参考文献のうち、森山(2001)・須賀(1995)・木下(1997)は「かもしれない」の項目(p.538)に掲載されているが(かつ森山は(2002)の誤記)、残りの森山(1986)・田村(1998)は【その他の複合辞~】(p.573,p.568)に掲載されており(これも森山は(1988)の、田村は(1997)の誤記)、検索に大変手間取った。

その他、図表の意味がわかりにくい箇所や、例文の判定・判断が著者と異なっている箇所、例文とその説明に不十分・不一致な点があり理解しがたい箇所等もあったが、個別的な細部の問題となるため、紙数の関係からここでは取り上げないことにする。

4 最後に

本稿では、田中寛氏の『日本語複文表現の研究—接続と叙述の構造—』と『複合辞からみた日本語文法の研究』の二作を取り上げ、その構成と概要、及び立場と特徴について具体的に紹介した。両作とも600~700頁という大著であるため、その全容を解説することは不可能だが、複合辞研究史的に重要と思われる諸点についてはほぼ言及できたのではないかと思う。

両作を概観するなかで、慣用的に結び付いて用いられることの多い、複合辞に隣接した様々な辞的表現が日本語には数多く存在することにまず驚かされた。そして、複合辞認定論では見過ごされがちな、そのような結合レベルを異にした様々な表現群を広く射程に置き、<構造文型→表現文型→機能文型>といった機能重視の見方を導入しながら、それらを網羅的・総合的に記述していく研究の重要性と必要性とを痛感させられた著作でもあった。

本論2・3では、批判も含めて細かいことを書き連ねてきたが、まずは何と言っても、全体像の把握が困難な、広大な領域を持つ辞的表現群を相手に、ほとんど手作業で得られた、それぞれ数千例を超える膨大な用例を駆使しながら、緻密かつ丹念に考察を積み重ねてこられた田中氏には、心底頭の下がる思いである。まさに、「複合辞を超えた」日本語文法の研究と言えよう。

また、田中氏は言語の文化的背景にも強い関心をお持ちで、随所にそのような記述が垣間見られたことも最後に付け加えておきたい。

[注]

1 松木(2012)

2 益岡(2005)では、これを「従属節と主節の意味的依存関係の重視」と言い換えている。

- 3 「A」は、Aと< >内のBとを随時入れ替えた表現が可能であることを示す。具体的に「ト<バ・タラ・ナラ>イ<ヨイ・ヨカッタ>」は、「とよい／とよい／とよかった」「ばいい／ばよい／ばよかった」「たらしい／たらよい／たらよかった」「ならいい／ならよい／ならよかった」の組み合わせが可能であることを意味している。
- 4 「テモ」は“接続助詞「テ」+係助詞「モ」”だが、一般に一語の接続助詞とされているため、対極に位置づけられる「テハ」のように複合辞と認識されることはない。本書でも、「テハ」については、その多層的な意味をあぶり出すために「ハ」の性質に立ち戻って詳細な分析がなされているが、「モ」についてはそれほど言及がない。
- 5 ここで重要なのは、こういった形式名詞の接続の様態には、中止の形をとる並列構造と、PQ間の[条件：帰結]という論理的展開構造があるという指摘である。参考例文にはその両方の例が並べて示され、表1にもそれを区別する印がついている。例えば、
- オ. 彼が遅刻して来た [コトデ]、会は大幅に開催が遅れてしまった。
- カ. これは私がやった [コトデ]、あなたには関係のないことだ。(p.506)
- では、オが論理的展開構造、カが並列構造である。「ウエ」には中止の用法がないという指摘もある。)この点については田中(2010)でも言及され、それぞれ「接続成分」「連用中止成分」と呼ばれている。ただ、田中(2004)では、
- フ. 私は先月、日本に来た [バカリデ]、まだ何も分かりません。
- ヘ. 彼はついさっき外出した [バカリデ]、いつ帰ってくるかわかりません。(p.507)
- のへは並列構造(連用中止成分)、フは一応論理的展開構造(接続成分)としながらも、フについては「接続助詞相当表現と中止表現との間に、境界線を引きにくい、あいまいなもの(p.506)」と指摘しているのに対し、田中(2010)では、同様の例について「接続成分に見えて実際は連用中止成分しか持たない表現(p.235)」と判断を変更している。
- 6 「二格をとる文末動詞述語(1)(p.613)」では、これらのうち代表的な表現形式について、ほぼパラフレーズした意味を考えて対照させている。「:」の左は個別的・分析的な表現、右は総合的・普遍的な表現とされている。
- 「にいたる、におよぶ: ようになる、ことになる」「にはおよばない: なくてもよい」
 「にはあたらぬ、にはいたらぬ: までもない」「につきる、にかざる: のが一番だ」
 「にたえない、にしるびない: ことができない、かねる」
 「に越したことはない: したほうがいい」「にすぎない、に限る: だけだ、しかない」
 「にまかせる: ようにする/させる」「に決まっている: はずだ、にちがいない」
- 7 接続成分の動詞的タイプとは、動詞の活用形がそのまま接続の意味をあらわすもので、「テ形式: のに加えて、のを受けて」「否定形式: に及ばず、を問わず」「条件形式: ときたら、という」と「提題形式: に至っては、とあっては」等を指し、文末標識の動詞的なタイプとは、前章(第5部第3章)で考察した助動詞相当表現や名詞と動詞の組み立て文型のことを指す。
- 8 接続成分で見たのと同様、文末成分にも意味的な平行関係を持つものがあるとの指摘もある。例えば、「～必要がある: ことが必要だ」「～現状だ: 現状にある: のが現状だ」等である。
- 9 本稿の3・4は、松木(2011)をもとに大幅に加筆したものである。
- 10 「をぬきにして」は、このⅢ類と次の「後置詞の“萌芽的”な形態」の両方に重複している。
- 11 二字下げの引用本文中以外で挙げた例文番号は本稿における通し番号であって、原著の例文番号とは異なる。
- 12 「文法化」と「複合辞化」の違いについては特に述べられていない。

[参考文献]

- 田中寛(2004)『日本語複文表現の研究 接続と叙述の構造』白帝社
- 田中寛(2008)『恥と隠蔽の言語学—「表徴」する日本語の発想と心理』(私家本)
- 田中寛(2010)『複合辞からみた日本語文法の研究』ひつじ書房
- 永野賢(1953)「表現文法の問題—複合辞の認定について—」
 (『金田一博士古稀記念言語民俗論叢』三省堂)
- 益岡隆志(2005)「書評 田中寛著『日本語複文表現の研究—接続と叙述の構造—』」
 (『日本語の研究』1-3)
- 松木正恵(1990)「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」

(『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』2)

松木正恵 (2006) 「複合辞研究と文法化—動詞が欠落した口語的複合辞を例として—」

(藤田保幸・山崎誠編『複合辞研究の現在』和泉書院)

松木正恵 (2011) 「書評 田中寛著『複合辞からみた日本語文法の研究』」

(『日本語の研究』7-2)

松木正恵 (2012) 「複合辞研究史X 複合辞認定に対する問題提起と研究の方向性」

(早稲田大学 教育・総合科学学術院『学術研究—人文科学・社会科学編—』60)

